

## ＜史料紹介＞テオドロス・メトキテス『ニカイア称讃演説』解題と翻訳

佐野 大起

### 解題

#### (1) はじめに

本稿が提供するの、ビザンツ帝国の文人テオドロス・メトキテス（1270–1332 年）の手による『ニカイア称讃演説』（*Νικαεύς*）全文の日本語訳である。メトキテスは皇帝アンドロニコス 2 世（在位 1282–1328 年）の下で宮廷に登用され、最終的には事実上の帝国宰相に登り詰めて長年にわたり国政を牛耳る傍ら、その生涯の間に 18 篇の弁論、20 篇の詩歌、その他天文学やアリストテレス哲学など多岐にわたる著作を遺した学者としても知られる<sup>1</sup>。都市ニカイアを主題とする『ニカイア称讃演説』は、その正確な作成年代は不詳ながらも（後述）、青年期のメトキテスが著した彼の最初期の作品の一つに数えられる。

小アジア・ビテュニア地方のアスカニア湖（現イズニク湖）畔に位置し、二度のキリスト教全地公会議の開催地としても有名なニカイア（現イズニク）は、ビザンツ期を通して帝国を構成する主要都市の一つであった<sup>2</sup>。1204 年から 1261 年に至る亡命の時代には、ラスカリス朝政権、いわゆるニカイア帝国が首都として利用した拠点の一つで、臨時の総主教庁が置かれ、学問と文化の中心地として栄えた。しかし小アジアでは、13 世紀の間に、ルーム・セルジューク朝の崩壊に伴って各地に勃興した君侯国（ベイリク）が次第にビザンツ領への侵攻を繰り返すようになってゆく。1302 年にニコメディア近郊のバフェウスで行われた会戦での大敗を機に帝国の東方防衛線は瓦解し、以降、小アジ

<sup>1</sup> テオドロス・メトキテスの生涯については、主に E. Trapp et al. (eds.), *Prosopographisches Lexikon der Palaiologenzeit*, 15 vols. (Vienna, 1976–96)（以下 *PLP* と略記）, no. 17982; I. Ševčenko, *Études sur la polémique entre Théodore Métochite et Nicéphore Choumnos* (Brussels, 1962); id., ‘Theodore Metochites, the Chora, and the Intellectual Trends’, in P. A. Underwood (ed.), *The Kariye Djami*, vol. 4 (New York, 1975), pp. 19–55; E. de Vries-Van der Velden, *Théodore Métochite : une réévaluation* (Amsterdam, 1987); A. Failler, ‘Pachymeriana nova’, *Revue des études byzantines* 49 (1991), 182–88; D. Angelov, *Imperial Ideology and Political Thought in Byzantium, 1204–1330* (New York, 2007), 72–74. 彼の著作については、S. Xenophontos, ‘The Byzantine Plutarch: Self-identity and Model in Theodore Metochites’ Essay 71 of the *Semeioseis Gnomikai*’, in J. North and P. Mack (eds.), *The Afterlife of Plutarch* (London, 2018), 24–25.

<sup>2</sup> ニカイアの歴史については、C. Foss (with the collaboration of J. Tulchin), *Nicaea: A Byzantine Capital and Its Praises. With the Speeches of Theodore Laskaris In Praise of the Great City of Nicaea and Theodore Metochites Nicene Oration* (Brookline, MA, 1996), 1–87.

アの主要都市は次々に失われていった。難攻不落の二重の城壁を擁するニカイアもまた、この潮流に抗うことは出来ず、1331年にオスマン侯国の手に落ちた。メトキテスの『ニカイア称讃演説』は、ビザンツ帝国、ないしキリスト教支配下における同市の姿を詳細に描いた最後の証言の一つという意味で、無二の価値を有する史料である。

## (2) 構成と内容

テオドロス・メトキテスの『ニカイア称讃演説』は、ウィーンのオーストリア国立図書館に所蔵されている Cod. Vindob. phil. gr. 95 (以下「V 写本」と表記)、ff. 1r-8v で全文が伝わっているほか、同写本の派生と推定される断片が、アトス山のイヴィロン修道院附属図書館所蔵の Cod. Athon. Iveron 388 (Athous 4508), f. 857 で現存している<sup>3</sup>。このうち V 写本は、本演説を含むメトキテスの弁論全 18 篇と金印勅書序文 1 篇を所収しており、恐らく彼自身の監督の下、1320 年代に弟子らにより筆写されたと考えられている<sup>4</sup>。

【表】に示した如く、『ニカイア称讃演説』はニカイア市をその地理的特徴、建造物、歴史といった観点から讃美することを目的とした修辭的演説である。第 1 節でメトキテスが述べるところによれば、彼自身は本作を「称讃演説」(ἐγκώμια)のジャンルに属するものと解しているようである。しかしまた、都市を鮮やかに活写するという性質上、本作は必然的に「エクフラシス」(ἐκφράσεις)の要素も含んでいる<sup>5</sup>。さらに、かような「都市を主題とする頌辞」は、今日では一種の独立した文学ジャンルとして扱われる場合がある。散文・韻文の別や長短は個々の作品ごとに多様ながら、これらは city encomia、urban eulogies、laudes urbium などと不統一的に総称される。ここでは、これを差し当た

<sup>3</sup> I. Polemis and E. Kaltsogianni (eds.), *Theodorus Metochites. Orationes* (Berlin/Boston, 2019), XIV. ただし、V 写本の範囲を誤って ff. 1-10v としている。V 写本については、Ševčenko, *Études sur la polémique*, 137-44, 177-84 も参照。

<sup>4</sup> Polemis and Kaltsogianni (eds.), *Orationes*, VII.

<sup>5</sup> 称讃演説とエクフラシス(描写)はいずれも、2-3 世紀のヘルモゲネスと 4 世紀のアプトニオスがそれぞれ『プロギュムナスマタ』(*Προγυμνάσματα*)の中で類型化している文学ジャンルである。E. Rabe (ed.), *Hermogenis Opera* (Leipzig, 1913), 14-18, 22-23; id. (ed.), *Aphthonii Progymnasmata* (Leipzig, 1926), 21-27, 36-41; cf. Foss, *Nicaea*, 124. なお筆者は拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国(1261-1328 年)における皇帝称讃演説」『西洋史研究』新輯第 49 号、2020 年、24 頁註 40 において、『ニカイア称讃演説』のジャンルをエクフラシスと記したが、これは部分的にしか正しくなかった。ビザンツ期の称讃演説については、主に H. Hunger, *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*, vol. 1 (Munich, 1978), 120-32. ビザンツ期のエクフラシスについては、主に ibid., 116-17; H. Maguire, *Art and Eloquence in Byzantium* (Princeton, 1981), 22-52; D. Nikou, I. Taxidis and I. Chrysostomidis, 'Οι εκφράσεις στη λογοτεχνία της ύστερης βυζαντινής περιόδου (13ος-15ος αιώνας)', *Βυζαντινά* 37 (2019-20), 193-212.

【表】テオドロス・メトキテス『ニカイア称讃演説』の構成と概要

節*	概要
第1節	序言：主題の偉大性と演説者の能力限界
第2節	序言：演説起草の動機
第3節	ニカイア市の建設
第4節	立地上の特性：海との絶妙な距離
第5節	湖
第6節	土地・土壌
第7節	城壁
第8節	建築群、公共浴場、病者・貧者のための慈善施設
第9節	修道院群
第10節	ヒュアキントス修道院附属聖堂**
第11節	聖トリュフォン教会
第12節	聖トリュフオンの奇蹟
第13節	第一ニカイア公会議
第14節	第一ニカイア公会議
第15節	第二ニカイア公会議
第16節	ニカイア帝国期、およびコンスタンティノーブル奪還後
第17節	結語：皇帝の功績と演説者の祈り

\* 節立ては各エディションごとに異なっている。ここでは最新の校訂版である Polemis-Kaltsogianni 版に準じた。

\*\* 名称の言及されない聖堂の同定については、Foss, *Nicaea*, 115–17 を参照。

り「都市称讃文学」と呼称する<sup>6</sup>。

都市称讃文学の創作は、古代から中世を通じてヨーロッパ各地で隆盛した。その題材としてビザンツ人の間で最も人気を集めたのは帝国の首都コンスタンティノーブルであつたが、特に中央の権威が揺らぎ、地方の相対的地位が上昇した後期（1204–1453 年）には、ニカイアやテッサロニケ、トレビゾンドといった地方都市を称える作品も増加した<sup>7</sup>。ニカイアを主題とした長大な演説としては、ニカイア皇帝テオドロス 2 世ラスカリ

<sup>6</sup> 都市称讃文学一般については、C. J. Classen, *Die Stadt im Spiegel der Descriptiones und Laudes urbium in der antiken und mittelalterlichen Literatur bis zum Ende des zwölften Jahrhunderts* (Hildesheim/New York, 1980). 特にビザンツ期全般の都市称讃文学については、H. Saradi, ‘The Kallos of the Byzantine City: The Development of a Rhetorical Topos and Historical Reality’, *Gesta* 34:1 (1995), 37–56.

<sup>7</sup> Id., ‘The Monuments in the Late Byzantine *Ekphraseis* of Cities’, *Byzantinoslavica* 69 (2011), 179–92; A. Akışık, ‘Praising a City: Nicaea, Trebizond, and Thessalonike’, *Journal of Turkish Studies* 36 (2011), 1–

ス(在位 1254–1258 年)が皇太子時代に著した『大都市ニカイアへの称讃演説』(*Εγκώμιον εἰς τὴν μεγάλοπολιν Νίκαιαν*)がある<sup>8</sup>。メトキテスの『ニカイア称讃演説』は、同演説の表現を随所で借用した可能性がある一方で<sup>9</sup>、同演説に比して描写が具体的であることや、何より、一般に 3–4 世紀の弁論家メナンドロスの作とされる修辞学教書『演示弁論の区分』(*Διαίρεσις τῶν ἐπιδεικτικῶν*)が解説する都市称讃の作法をかなり忠実に守っているという特色が指摘されている<sup>10</sup>。フォスとヴドゥリが評する如く、彼の作品が都市称讃文学というジャンルにおける良き手本であることに疑いはない<sup>11</sup>。

### (3) 作成年代と動機、背景

『ニカイア称讃演説』が作成された状況や動機については不詳な点が多い。というのも、同作品に言及する他の同時代史料が、メトキテス自身の著作を含めても一切存在しないためである。唯一確からしいのは、ニカイア市内で執筆されたということである。これは、演説の随所に散見される「この都市」「ここ」といった表現から察せられるばかりではない。決定的なのは、第 10 節において、その名が挙げられることなく突如ヒュアキントス修道院附属聖堂の内装に関する具体的な「エクフラシス」が始まっていることである。豪華絢爛な天井から側壁、床、そして柱廊へと、演説者の言葉に従って自ずと視線が転移してゆく。描写の鮮やかさは、あたかも我々がそこにいるかのような感覚さえ与えてくれる。これはロビーがいみじくも指摘する通り、本演説がまさにこの聖堂内で読み上げられたことを強く示唆する<sup>12</sup>。また、結語に当たる第 17 節では、演説家は

25. 後期ビザンツの都市称讃文学については、A. Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων κατά την ὕστερη βυζαντινὴ περίοδο υπό το πρίσμα της προγενέστερης παράδοσής τους’, unpublished doctoral dissertation, National and Kapodistrian University of Athens (Athens, 2016)も参照。コンスタンティノーブルを主題とする都市称讃文学については、E. Fenster, *Laudes Constantinopolitae* (Munich, 1968)。

<sup>8</sup> 演説の最新の校訂版は A. Tartaglia (ed.), *Theodoros II Ducas Lascaris. Opuscula Rhetorica* (Munich, 2000), 67–84。本演説については、Foss, *Nicaea*, 128–63 も参照。

<sup>9</sup> E. Mineva, ‘Ο «Νικαεὺς» τοῦ Θεοδώρου τοῦ Μετοχίτου’, *Δίπτυχα* 6 (1994–95), 309–12。ただし、ヴドゥリはこの見方に対し批判的である。Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 349。

<sup>10</sup> Foss, *Nicaea*, 129; このほか、4 世紀のリバニオス『アンティオキコス (アンティオキア称讃演説)』(*Ἀντιοχικός*)からの間接的影響も指摘されている。Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 348–49。

<sup>11</sup> Foss, *Nicaea*, 128; Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 348。

<sup>12</sup> A. Rhoby, ‘Theodoros Metochites’ *Byzantios* and Other City *Encomia* of the 13th and 14th Centuries’, in P. Odorico and C. Messis (eds.), *Villes de toute beauté : l’ekphrasis des cités dans les littératures byzantine et byzantino-slaves* (Paris, 2012), 93。ヒュアキントス修道院(生神女就寝教会)とその附属聖堂については、主に T. Schmit, *Die Koimesis-Kirche von Nikaia: Das Bauwerk und die Mosaiken* (Berlin, 1927); O. Wulff, *Die Koimesiskirche in Nicäa und Ihre Mosaiken Nebst den Verwandten Kirchlichen Baudenkmälern* (Strassburg, 1903); Foss, *Nicaea*, 97–101。本建物は残念ながら 1920 年代初頭に破壊された。在りし日の姿は、これらの文献に収められた写真やスケッチを通じて垣間見ることが出来る。

「最も強大なる陛下」と皇帝に直接呼び掛け、さらにその皇帝が「その都市で時間を過ごして」と述べている。この表現は必然的に、本演説が皇帝の前で朗読されたことを読者に想像させる。最後に、本作品が収められている V 写本がメトキテスの監督下で編纂されたとすれば、作品の所収順は彼自身の意図を反映している可能性が高い。同写本では、少なくとも執筆時期が特定されているものに関する限り、ただ 1 篇の例外を除き、全作品が作成順に並べられていることが分かっている<sup>13</sup>。つまり、(この例外ゆえに絶対の信頼を置くことは出来ないにせよ) 同写本の中で先頭 (ff. 1r–8v) に配置されている『ニカシア称讃演説』は、高い蓋然性で著者の最初期の作品ということになる。

著者メトキテスは 1270 年に生まれ<sup>14</sup>、自伝によれば、高等教育を修了して間もない「20 歳と少し」の頃、皇帝の前で 1 本の演説を披露したことにより、その場で宮廷の一員として迎え入れられた<sup>15</sup>。今日の学界では、これらの情報と先述の『ニカシア称讃演説』の内容から、本演説がまさにメトキテスの宮廷入りを決定付けたとする見方が事実上の定説となっている<sup>16</sup>。実際、メトキテスは 1285 年に都から小アジアに移住したことが知られており<sup>17</sup>、一方で皇帝アンドロニコス 2 世は、1290 年または 1291 年から 1293

<sup>13</sup> V 写本所収作品の作成年代は、それぞれ異説もあるが概ね以下の通り（ここでは各弁論をタイトルではなく、所収順に則り第 n 弁論のように表記する）。第 5 弁論：1290/91 年。第 6 弁論：1305–21 年。第 7 弁論：1291–93 年または 1294–99 年。第 8 弁論…1299 年。第 9 弁論…1303 年。第 10 弁論：1307 年。第 11 弁論：1308/09 年。第 13、14 弁論：1316/17 年以後。金印勅書序文：1320 年以後。第 15 弁論：1328–30 年。第 16 弁論：1328 年以後。第 17 弁論：1330/31 年。第 18 弁論：1328 年以後。したがって、以上の年代推定が正しければ、第 6 弁論のみが明らかに実際の作成順を無視していることになる。拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」4–6 頁；I. Polemis (ed.), *Oi duo basilikoi logoi* (Athens, 2007), 33–42; id. (ed.), *Theodoros Metochites. Hethikos ē peri paideias*, 2nd ed. (Athens, 2002), 9\*–10\*; Ševčenko, *Études sur la polémique*, 135–44; id., ‘The Logos on Gregory of Nazianzus by Theodore Metochites’, in W. Seibt (ed.), *Geschichte und Kultur der Palaiologenzeit* (Vienna, 1996), 222–24; Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 351–58.

<sup>14</sup> Failler, ‘Pachymeriana nova’, 183.

<sup>15</sup> I. Polemis (ed.), *Theodori Metochitae Carmina* (Turnhout, 2015), 18–19. 後期ビザンツにおける「高等教育」については、主に C. N. Constantinides, *Higher Education in Byzantium in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries (1204–ca. 1310)* (Nicosia, 1982).

<sup>16</sup> 主として、Ševčenko, ‘Theodore Metochites’, 25–26; de Vries-Van der Velden, *Théodore Métochite*, 61; Failler, ‘Pachymeriana nova’, 184–85; Foss, *Nicaea*, 80, 95; Polemis, *Oi duo basilikoi logoi*, 41–42; Rhoby, ‘Theodoros Metochites’ *Byzantios*, 83–84; Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 317, 322. 直近では P. A. Agapitos, ‘Literature and Education in Nicaea and their legacy: An Interpretive Synthesis’, *Medioevo Greco* 21 (2021), 36; K. Belke, *Tabula Imperii Byzantini*, vol. 13: *Bithynien und Hellespont* (Vienna, 2020), 207 などがこの所説を採用している。異説として、ライウはメトキテスの登用の経緯を『第一皇帝称讃演説』および『第二皇帝称讃演説』と看做し、アングロフは『ニカシア称讃演説』の可能性も残しながらも『第一皇帝称讃演説』を提唱している。A. Laiou, *Constantinople and the Latins: The Foreign Policy of Andronicus II (1282–1328)* (Cambridge, MA, 1972), 77–78; Angelov, *Imperial Ideology*, 73. しかし管見の限り、これらの所説は以後の研究で受容されていない。

<sup>17</sup> メトキテスは 1285 年夏、父（ゲオルギオス・メトキテス）が都から追放されてビテュニア地方の要塞に投獄されたことに伴い、小アジアの何処かに移住した。Ibid., 72–73. なお、先行研究ではしばしばこの移住が 1283 年に行われたとされることがあるが、これは誤りである。

年にかけて小アジアの諸地域を巡幸し、その過程で確かにニカイアを訪れている<sup>18</sup>。ゆえに、メトキテスが巡幸中の皇帝にニカイアで初めて謁見し、そこで同市を題材とする演説を披露し、即座に家臣に加えられたというシナリオは、一見、筋が通っているように思われる。

しかし筆者は別稿で、メトキテスの後年の著作の分析に基づき、この通説に対する批判を論じた。すなわち、アンドロニコス2世がメトキテスを採用したのは実際には巡幸前にあたる1290年または1291年のコンスタンティノープルにおいてであり、その契機となった演説も、V写本の第5番目(ff. 81r-96v)に所収されている『第一皇帝称讃演説』(*Βασιλικὸς πρῶτος*)だったのである<sup>19</sup>。

それでは、『ニカイア称讃演説』はいつ如何なる目的で創作されたのであろうか。本作がニカイアで、かつ皇帝の前で朗読されたという点については、管見の限り全ての先行研究が疑いない事実と看做している。この前提が正しければ、演説の作成時期は必然的に1290年または1291年から1293年にかけて行われた巡幸の最中、すなわちメトキテスが宮廷入りを果たした後になる。何故なら、単独皇帝として即位した後のアンドロニコス2世がニカイアを訪問したという事実はこの時を除いて確認されておらず、唯一その可能性がある1284年から1285年初頭にかけての小アジア滞在時には、メトキテスはまだコンスタンティノープルに居住していたためである<sup>20</sup>。皇帝は1290年後半から翌年前半の時期、恐らく冬の間にコンスタンティノープルを出発し、知られている限りビテュニアのダキビュザ、ヘレノポリス、ニコメディア、および「聖グレゴリオスの要塞」の近くに位置する無名の村に立ち寄ったほか、サンガリオス河畔の要塞の視察または修繕工事を行った後、ニカイアで休息を取った。その後、ロパディオン滞在を経て南下し、遅くとも1291年11月までにニュンファイオンに移動し、以後1293年6月までそこに留まった<sup>21</sup>。それぞれの経由地にどの程度の期間滞在したのかは史料の曖昧な表現から

<sup>18</sup> アンドロニコス2世が1290/91-93年に実施した小アジア地域巡幸については、主に以下を参照。Laiou, *Constantinople and the Latins*, 76-79; I. Polemis, ‘Ο δεῦτερος Βασιλικὸς Λόγος τοῦ Θεοδώρου Μετοχίτη καὶ οἱ ἐκστρατεῖες τοῦ Ἀνδρονίκου Β’ Παλαιολόγου στὴ Μ. Ἀσία’, *Ἑλληνικά* 46 (1996), 51-58.

<sup>19</sup> 拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」4-5頁。メトキテスは、シェフチェンコとアンゲロフが示唆するように、1289年または1290年に帰京していたと考えられる。Ševčenko, *Études sur la polémique*, 271; Angelov, *Imperial Ideology*, 73.

<sup>20</sup> アンドロニコス2世は1284年2月から4月にかけて、小アジア西部の沿岸都市アドラミュティオンで教会問題の対処に当たった。その後の行動は不明だが、12月に同市と北西部ランプサコスでの所在が確認されており、翌年1月に都に帰還した。Laiou, *Constantinople and the Latins*, 34-35; A. Failler (ed.), V. Laurent and A. Failler (trs.), *Georges Pachymères, Relations historiques*, 5 vols. (Paris, 1984-2000), vol. 3, 69-77; Failler, ‘Pachymeriana nova’, 181-82.

<sup>21</sup> この巡幸の行路については三つの同時代史料が情報を伝えているが、いずれも断片的であり、かつ部分的に矛盾しているため、未だ全容は明らかにされていない。Failler (ed.), *Georges Pachymères, Relations historiques*, vol. 3, 117-19, 171, 183, 199; J. Cozza-Luzi (ed.), *Georgius*

想像することしか出来ないが、皇帝のニカイア訪問は恐らく 1291 年に比定され、よってメトキテスの『ニカイア称讃演説』もこの時に作成されたと推論される。

しかし、この仮説はいくつかの問題を提起する。第一に、メトキテスが実際の作成順を無視し、本演説を V 写本の巻頭に置いた意図である。本作品が彼にとって最も短い散文作品であるという事実や、修辞学教書の規定に沿った謂わば「凡庸」な内容構成から、ともすると彼は、本作品を自身の処女作と思わせたかったのかもしれない。あるいはより積極的な動機を想定するならば、小アジアの情勢がますます悪化を辿る中、ニカイア市の美しさを称える本作品をより人目の付くように配置することで、彼は帝国東方地域に対する社会と宮廷の関心を高めようとしたのであろうか。いずれの可能性も否定はできないが、憶測の域を出るものでもない。

第二の問題は、演説が披露された具体的な機会である。巡幸の過程でニカイアに駐蹕した皇帝は、恐らくニカイア帝国時代の宮殿を拠点にしたと考えられる<sup>22</sup>。一方、演説の中で一般市民に対する呼び掛けが一切なされていないという事実、および朗誦地と推定されるヒュアキントス修道院附属聖堂の規模は、演説があくまでも皇帝に近い人々のみで構成される会合、いわゆる私的な「皇帝のテアトロン」で発表されたことを示唆する<sup>23</sup>。皇帝が、この学芸愛好的な会合を宮殿ではなく敢えてヒュアキントス修道院附属聖堂で開き、かつそこに集うごく少数の集団の中に、自身の家人となって未だ間もないメトキテスを含めたとすれば、その目的は一体何だったのであろうか。さらに留意すべきことに、聖堂の内装に関する演説の語りは、駐蹕期間中に皇帝が同聖堂を訪問すること、およびそこで演説を贈る機会が自身に与えられることを、メトキテスが予め確信していたことを示している。これは、メトキテスが皇帝の命令に基づいて演説を書いたと考えれば納得しうが、もしそうであったならば、同時代の演説家マクシモス・プラヌデス (c. 1255–1305 年) がそうしたように<sup>24</sup>、演説作成の動機として冒頭で言及する格好の事実だったはずである。

---

*Metochites. Historia Dogmatica*, liber III, in A. Mai, *Nova Patrum Bibliotheca*, vol. 10 (Rome, 1905), 327–29; Polemis and Kaltsogianni (eds.), *Orationes*, 279–90; cf. A. Failler, ‘Chronologie et composition dans l’histoire de Georges Pachymères (livres VII–XIII)’, *Revue des études byzantines* 48 (1990), 13–17, 20–24; Ševčenko, *Études sur la polémique*, 138–40; Angelov, *Imperial Ideology*, 73–74n173.

<sup>22</sup> ニカイア皇帝たちが使用したニカイアの宮殿は特定されていないが、その存在自体は複数の史料から確かめられる。市内南西部の劇場跡付近で発掘された大規模な構造が、それに当たる可能性が唱えられている。Foss, *Nicaea*, 119.

<sup>23</sup> ロビーは一般の人々から成るより広範な聴衆を想定しているが、これは受け容れ難い。Rhoby, ‘Theodoros Metochites’ *Byzantios*, 83. 「(皇帝の) テアトロン」については、拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」14 頁および 30 頁註 97 に挙げた諸文献を参照。

<sup>24</sup> マクシモス・プラヌデスについては、*PLP*, no. 23308. 彼は 1294 年に朗誦した皇帝称讃演説の冒頭において、演説起草の動機の一つとして、皇帝から直々に指名されたことに言及している。拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」14 頁。

これらの疑義に照らしてみれば、『ニカイア称讃演説』が実際には皇帝の前で朗読されなかった可能性を検討することも大いに価値があるように思われる。写本中の並び順に従うならば、本演説は『第一皇帝称讃演説』によって決定付けられた著者の宮廷入りよりも前に作られたことになる。ロビーが分析するところによれば、『ニカイア称讃演説』の本文全体と各文の短さ、およびリズムの規則性は、本作が実際に口頭で朗読された可能性が高いことを示しているという<sup>25</sup>。しかし私見では、必ずしもそれが皇帝の前で行われたと看做す必然性はない。若者が権力者の面前で自らの学識を証明することは、既に古典期から出世のための一般的な手段の一つであり、このことは 13 世紀末の知識人たちにも共有されていた<sup>26</sup>。よって本演説は、宮廷入りを志してニカイアで勉学に勤しんでいたメトキテスが、近い将来、皇帝の前で披露することを想定して執筆した習作という可能性が浮かび上がるからである。

この仮説は、いくつかの間接的な根拠によって支えられるかもしれない。まずメトキテスは、後年、自らが学生時代を過ごした小アジアの魅力を語るに際し、各地で隆盛する修道院に触れながら、自らも多くの修道士たちと交流したことを述べている<sup>27</sup>。メトキテスは明言していないが、これがシェフチェンコの提唱するように彼らの間で教育を受けたことを意味するとしたら、ヒュアキントス修道院という演説の朗読地は、かかる文脈に最もよく適合する<sup>28</sup>。次に、本演説の結語における皇帝の業績はごく簡潔かつ抽象的で、一般的なトポスのみで構成されている。これは、同じ著者の『第二皇帝称讃演説』(*Βασιλικὸς δεῦτερος*)に見られるような、1291 年のニカイア訪問でアンドロニコス 2 世が市民に施したとされる恩恵の記述とは明確に異なっている<sup>29</sup>。具体性の明らかな欠如は、『ニカイア称讃演説』が皇帝の実際のニカイア訪問よりも前に作成されたことを示唆する。最後に、メトキテスが宮廷入りを果たした経緯は、彼の愛弟子ニケフォロス・グレゴラス (c. 1295–1360 年) のそれと多くの共通点を有している。いずれも高等教育を修了後、複数の著作を送付することで皇帝の周囲の人々の認知を得、その後、皇帝の前で 1 本の演説を述べたことで、その場で宮廷内の地位を提案されている<sup>30</sup>。かかる類

<sup>25</sup> Rhoby, 'Theodoros Metochites' *Byzantios*, 83–86.

<sup>26</sup> 拙稿「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」1 頁。

<sup>27</sup> K. Hult (ed.), *Theodore Metochites on the Human Condition and the Decline of Rome: Semeioseis gnomikai* 27–60. *A Critical Edition with Introduction, Translation, Notes, and Indexes* (Gothenburg, 2016), 84–90.

<sup>28</sup> Ševčenko, *Études sur la polémique*, 270–71.

<sup>29</sup> Polemis and Kaltsogianni (eds.), *Orationes*, 287–89.

<sup>30</sup> ニケフォロス・グレゴラスについては、PLP, no. 4443. 彼が宮廷および皇帝への接近を果たした経緯については、拙稿「ビザンツ帝国における皇帝の意思決定と諮問：アンドロニコス二世治下の助言者たち」、高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体：統治の諸相と比較』東京大学出版会、2022 年、608 頁、同「パライオロゴス朝初期ビザンツ帝国における皇帝称讃演説」7 頁。



似が暗示するのは、メトキテスが、自らが出世のために実践した手段をそのまま模倣するよう弟子に教示したということである。グレゴラスが初めて著した長編散文作品は、故郷のヘラクレイア・ポンティケを称える演説であったことが、彼自身の書簡から知られている<sup>31</sup>。この事実は翻って、メトキテスの処女作もまた 1 本の都市称讃演説であったことを窺わせる。

以上の仮説に対しては、二点の反論が予想される。まずメトキテスは自伝の中で、自身が高等教育の修了直後に書物の形で公表し、皇帝の認知を得るきっかけとなった著作群について語っている。それによれば、彼は何らかのギリシア人の歴史に関する物語と聖人伝とをそれぞれ複数発表したらしい<sup>32</sup>。このうち後者は、少なくとも V 写本の第 2、3、4 番目に所収されている聖人伝を指していると考えられる<sup>33</sup>。しかし他方、ギリシア人の歴史に関する作品が、V 写本の先頭に所収された『ニカイア称讃演説』を念頭に置いているとは考えにくい<sup>34</sup>。メトキテスが本演説を V 写本に収録したという事実は、彼がこの作品に相応の自信を持っていたことを窺わせるが、それを踏まえるならば、彼が自伝の中で、人生に転機をもたらした作品の一つとしてこれに言及していないことは不可解であるようにも思われる。ただし私見では、この際メトキテスが公表した作品の中に、本当に『ニカイア称讃演説』が含まれなかった可能性は十分にある。というのも、

<sup>31</sup> P. A. M. Leone (ed.), *Nicephori Gregorae Epistulae*, vol. 2 (Matino, 1982), 192 (ep. 65.11–21). またグレゴラスは、この次に創作した作品が皇帝称讃演説であるとも説明している。Ibid., 192 (ep. 65.22): 'Ὁ δὲ μετ' αὐτὸν εὐθὺς Πρὸς βασιλέα μοι γίγνεται. この演説が 1321/22 年に皇帝の前で披露されたこと、そして彼が遅くとも 1316 年までにメトキテスの弟子となっていたことを踏まえるならば、故郷を称える演説がメトキテスの下で著された可能性は高い。Cf. D. Manolova, 'Discourses of Science and Philosophy in the Letters of Nikephoros Gregoras', doctoral dissertation, Central European University (Budapest, 2014), 12–13. 本作品は現存していないが、本文の一部がグレゴラスの別の書簡の中で引用されている可能性がある。J. L. van Dieten (tr.), *Nikephoros Gregoras. Rhomäische Geschichte, Historia Rhomaike*, vol. 1 (Stuttgart, 1973), 44–45.

<sup>32</sup> Polemis (ed.), *Theodori Metochitae Carmina*, 18.362–72; B. Bydén, *Theodore Metochites' Stoicheiosis Astronomike and the Study of Natural Philosophy and Mathematics in Early Palaiologan Byzantium* (Gothenburg, 2003), 422.165–69.

<sup>33</sup> 該当する 3 作品とは、順に聖マリナ、大天使ミカエル、聖デメトリオスへの崇敬を表する聖人伝である。メトキテスはこのうち最後者の執筆の動機について、イオニア地方に住む「異国の者に」(ἐπ' ἄλλοδαπῆς)襲い掛かった病を治癒してくれた聖人に感謝するためと述べている。このことから、少なくとも本作はメトキテスの小アジア居住時代かその直後に執筆されたと考えられる。Polemis and Kaltsogianni (eds.), *Orationes*, 110; cf. Ševčenko, *Études sur la polémique*, 270; E. Kaltsogianni, 'Theodore Metochites and His Logos on the Archangel Michael: An Essay on the Text's Sources and Its Intellectual Background', *Parekbolai* 5 (2015), 19. なお、ポレミスはこれら 3 作品に加え、この時に公表された作品にはナジアンゾスのグレゴリオスと新致命者ミカエルをそれぞれ称える 2 篇の聖人伝も含まれることを示唆している。I. Polemis (tr.), *Theodoros Metochites. Poems* (Turnhout, 2017), 62b. しかし、このうち前者の作成時期は 1305–21 年である可能性が高く（上記註 13 を見よ）、後者も V 写本で後方の第 12 番目に所収されていることから、メトキテスの最終期の作品とは考えにくい。

<sup>34</sup> ここで言及されている作品は、ポレミスが想定する如く、散逸したか、または後年『格言的所見』に収録されたと考えるのが妥当である。Ibid., 62a.

本演説がニカイア滞在中の皇帝の前で朗読されたことを前提とする結語の語りは明らかな虚構であり、これを皇帝やその周囲の人々が読んだならば、彼らの間に疑義を生ぜしめる恐れがあったためである。

予想される第二の反論は、メトキテスのニカイア居住経験を証言する史料の不在である。『ニカイア称讃演説』という作品の存在は、一見すると著者がニカイアという都市に特別の愛着を抱いていたことの証のように思われるが、実のところ、彼が同市と縁が深かったという事実は必ずしも自明ではない。メトキテス研究の先鞭を付けたベックは、かつて彼の出生地をニカイアと考えたが<sup>35</sup>、これはシェフチェンコが指摘した通り、『ニカイア称讃演説』に含まれる「ある意味私の故郷」という部分の「ある意味」(τὸ μέρος)を読み落としたことによる誤解であった<sup>36</sup>。メトキテスは後年、『格言的所見』(Σημειώσεις γνωμικαί)において、「若い頃から私が住み、最も楽しく過ごした」地としてイオニア、リュディア、アイオリス、フリュギア、ヘレスポントスを挙げているが、ここにニカイアが位置するビテュニアの名は無い<sup>37</sup>。彼は他の箇所でも、「特に多くの時を過ごした」場所としてリュディアとイオニアしか挙げていない<sup>38</sup>。すなわち、1285年に都から小アジアに転居したメトキテスが、その後1289年または1290年に再び上京するまでの間に、少しでもニカイアに居住した経験があることを示す史料は何も無いのである。しかし、これらの地名は全て、「蛮族」に奪われた東方の帝国領を嘆く文脈の中で挙げられている。したがって、ここでのビテュニアへの言及の不在は、単に執筆当時、まだ同地方が辛うじてビザンツ勢力下にあったためと考えられ、ゆえにメトキテスのニカイア居住経験を直ちに排除するものではない。

以上に見てきたように、『ニカイア称讃演説』の年代特定を可能にする直接的な証拠は無く、現段階では断定的な結論を下すことは出来ない。しかし今日の通説、すなわち本作がメトキテスの宮廷入り後、1291年頃に皇帝の小アジア巡幸の過程で起草されたものとする仮定が生ぜしめる複数の問題を解決しうる一つの仮説として、本作を著者の学生時代に執筆された作品と想定することは無意義ではあるまい。小アジア各地を転々としたメトキテスがどの段階でニカイアに滞在したのかを知ることが不可能である以上、本作の執筆時期は、彼が小アジアに転居した1285年夏から、再び上京する1289年または1290年までの間に比定するよりほかない。しかし、この仮説が正しければ、本作はメトキテスが実際にニカイアに居住したという事実、そして「ある意味私の故郷」と言

<sup>35</sup> H.-G. Beck, *Theodoros Metochites: Die Krise des Byzantinischen Weltbildes im 14. Jahrhundert* (Munich, 1952), 3.

<sup>36</sup> Ševčenko, *Études sur la polémique*, 269–71.

<sup>37</sup> Hult (ed.), *Theodore Metochites on the Human Condition and the Decline of Rome*, 72.1–3.

<sup>38</sup> Ibid., 90.16–18.

わしめるほどの彼の同市に対する思慕を裏付ける唯一の証言として、一層その価値を高めるであろう。

#### (4) 凡例

- ◆ 底本は、最新の校訂版である I. Polemis and E. Kaltsogianni (eds.), *Theodorus Metochites. Orationes* (Berlin/Boston, 2019), 1–14 を使用した。その他のエディションとして以下がある。C. N. Sathas (ed.), *Μεσαιωνική Βιβλιοθήκη*, vol. 1 (Venice, 1872), 139–53; E. Mineva, ‘Ο «Νικαεὺς» τοῦ Θεοδώρου Μετοχίτου’, *Δίπτυχα* 6 (1994–95), 314–25; C. Foss (with the collaboration of J. Tulchin), *Nicaea: A Byzantine Capital and Its Praises. With the Speeches of Theodore Laskaris In Praise of the Great City of Nicaea and Theodore Metochites Nicene Oration* (Brookline, MA, 1996), 164–94 (ギリシア語テキストは Sathas 版の再版)。各エディションの相違については、Polemis–Kaltsogianni 版のアパルトゥスを参照。
- ◆ 近代語訳としては、Foss, *Nicaea*, 165–95 (英語、J. Tulchin との共訳) があり、適宜参照した。
- ◆ 節番号は Polemis–Kaltsogianni 版に準じた。
- ◆ 底本において ( ) で示されている箇所は、ここでも ( ) 内に訳出した。
- ◆ 補足が必要と思われる箇所は [ ] で示した。
- ◆ 換言による語意の明瞭化が必要と思われる箇所は [= ] で示した。
- ◆ 引用表現は聖書由来のものに限り ( ) 内に示した。その他の著作 (ギリシア古典・教父、金言、テオドロス・メトキテスの他作品など) 由来の表現については、特に重要と思われるものに限り脚註に示した。より完全な引用元については、底本の脚註を参照。
- ◆ 本文に含まれる表現や歴史的事実については、以下の註釈および分析も参照されたい。Foss, *Nicaea*, 197–203; Voudouri, ‘Αυτοτελή εγκώμια πόλεων’, 339–49.

## 翻訳

### テオドロス・メトキテス『ニカイア称讃演説』

1. この都市〔＝ニカイア〕に対して私がこれまで行ってきたことは、彼女をただ沈黙のうちに称えることでした。そして、演説を捧げることが適当と考えるほどに、また美しいものについての慣習である<sup>エウフエミア</sup>頌辞を贈ることを正当と思うほどに、あまりにも過度に美を愛する者にならぬよう努めてまいりました。というのも、彼女の素晴らしさを遜色なく捉えることは、弁術において卓越し、そのようなことに関する能力が偉大な仕事に値すると看做されている者たちにとってでさえ、幾分骨の折れることだと私には思われるからです。それにまた、今回の場合、演説はその場において見ている聴衆の前で行われ、彼らは少なくとも見えているものを確かめることが出来ます。熟知している聴衆の前で努力したところで、<sup>エンコミア</sup>称讃演説において見劣りするだけでなく、発言を事実には肩させないばかりか、ましてや現実を遥かに下回ってしまうとしたら、大いに恥ずかしいことでしょう。無知な者なら安易に、その苦しみを以て十分だと考え、偶然得られたものに満足するかもしれません。しかし、大層な仕事を自らに課し、かつそれを分不相応だと認めている者が、一体どうして成功することが出来るでしょうか。審査員が直ちに彼の言葉を、事実に関する自らの知識に適用し、照合するかもしれないのですから。

2. ところが、演説起草の最大の障壁になると思われたまさにこのことが、却って今回の試みに取り掛かるよう私を鼓舞し、この都市について精一杯語る勇気を私に持たせました。というのも、主題の中にあって聴いておられる方は、彼〔＝演説者〕が演説の中でどこまで進んでいるのかお分かりになることでしょうし、また現実に劣る語りは主題の偉大性のゆえであって、より良いものに関する熱意は不面目なことではなく、同様に非難されるべきことでもない<sup>と</sup>と気立てよく裁量して、すっかり赦すことも出来るでしょうからです。彼自身が偉大な主題のことを尊重し、他の人々にもそのように考えてほしいと望んでいる場合はなおさらです。それに、このことは決して酷いことではなく、むしろ、このように思う聴衆にとって喜ばしいことです。また演説者にとっても、現実<sup>と</sup>に及ばず、それゆえに自らに課した仕事の優越性を実感することは、同等に喜ばしいことなのです。

3. このような理由から、私はこの試みに専念しました。そして、自ら選んだように見え

るこの責め苦へと導かれたのです。そうは言っても、この最も美しい都市は、ある意味私の故郷です。そして故郷には、何としてでも、自身に出来ることの中から何かを捧げる義務があるというものです。さて、慣例では、このようなことを引き受ける者は、現にあって目に見えるものを扱うのみならず、さらに遡ることとされております。そして、遙か昔のことから手を付け、称讃の言葉で古代を崇高化するのです。もし私が両方を満足させることが出来ると考えたなら、用意された時間よりも多くを費やし、都市の昔話に言葉を尽くすことに何の問題も無かったかもしれません。しかし今、見えているものに打ち克つだけの技量が無く、しかもそれを説明することの方が遙かに必要だというのに、一体どうしてそのような野心を抱くべきでしょうか。何となれば、並々ならぬ熟慮を望む人には、ビテュニア人の崇高な昔話を調べ上げ、さらに、如何に大きな名声が当初からその都市にあり、かつそれが如何に限られたものでなかったかを調べ上げる機会がふんだんにあるからです。少なくない人々に熱望され、むしろ過去における他の高貴な人々にとってでさえ野望の的となり、さらにはかのトラヤヌス、後のローマ皇帝は——<sup>クロノス</sup>時間は彼の心性と人格に関する多くの評判を、またその手による多くの偉大な業績を、我々に響き渡らせることに躊躇していません——、他の者たちの美を愛する努力について吟味したり時間を費やしたりすることを決して恥じず、むしろ、良い功績に手を差し伸べるべきと考えました。そして可能な限り先へ進むために、他のことと併せて、まさにこの都市ニカイアを打ち建て、今あるように、彼の<sup>メガロプシュキア</sup>寛大さの記録かつ記念碑としたのです<sup>39</sup>。かくして彼女は、古くて新しいものと看做されうるのです。もし古代が崇高だと言うのなら、それはこの都市についても言えるでしょう。そして、もし常により良い判断を下す時間が賢者であるならば、それもまた、この都市に帰せられることでしょう。

4. しかしお話しした通り、私にはそのようなことに忙殺され、努力を無駄にしている暇はありません。さて、この都市が優れた立地を引き当て、地上で有利な位置にあること、これは一目瞭然であり、ゆえにそれを言葉で示そうとすることは正当なことです。事実、彼女は安全性も美しさも欠いていないほど好都合であるどころか、むしろこれ以上のものはどこにも見当たらないというほど、その両方を十分に備えています。まず彼女は、海に頼っているように見えて、さほど頼ってはいません。恐らくそれゆえに、〔海と〕隣り合わず、共に生きもしないことに決めたのでしょう。むしろ、これほどまでに〔内陸に〕退いているがゆえに、そこ〔＝海〕からのあらゆる良いものを難なく享受できる一

<sup>39</sup> ローマ皇帝トラヤヌス（在位 98–117 年）は、実際にはニカイア市を建設も再建もしていないが、ビザンツ人の間では彼の業績と信じられていた。Foss, *Nicaea*, 197–98.

方で、もしそこから何か敵意を持ったもの——見えない形で海から忍び寄るようなもの——が来たとしても、彼女は遠く離れており、何も恐れることはありません。そして、喜ばしいと同時に斬新でもある真に驚嘆すべきことは、彼女がその反対側のことを——これは全く不可避なように思われるのですが——共有していないということであり、むしろそこから美しいものを好きなだけ豊かに享受する一方で（それに実際、気前の良い隣人が割り当てられたのです）、そこからのあらゆる厄介者は無力にも遮断され、手を出す術もありません。このことは、話を聞くことが出来るのみならず、過去の全時代がここで証拠を提示する用意が来ています。ある時代では、今日ある限り全ての沿岸諸都市が——そのあるものは遠く、あるものはここからすぐ近くで繁栄しておりますが——しばしばその命運を変え、哀れにも海と交わした盟約からの解放を願いました。ところが、ここでは生活は穏やかなままであり、それに加え、彼女は謂わば難破した他〔の都市〕のための港となったのです。

5. しかし、これは脇道から持ち込まれたことです。演説がまさに熱弁しつつあったのは、海からの攻撃は往々にして秘匿され見えないものであるがゆえに、この都市はそれに過度の信頼を置かないと決め、地上の安全へと退いたということです。けれども、独力で好きなことを容易く実現したりしなかったり出来る人のように、彼女には、必要な限りのものをふんだんに供給する手近な海があるのです。そしてそこでは、〔海の〕傍に住む都市に全く劣らず、その豊かさを贅沢に楽しむことが出来るのです。それと私はまだ、都市から広がるこの海<sup>40</sup>を言い添えておりませんでした。その水は目で見れば透明で、口に運べば甘く、身体にとっては健康の源です。他に何か例を挙げられるものがあるかどうか分からないほど、素晴らしく美しく、入手しやすく、手近な治療薬です。さらにその大きさは、正確に知っている人なら間違いなく確信していることですが、他の如何なる湖とも比較できないほどです。それに、あらゆる類の美食の宝庫であり、必要のためにも、贅沢のためにも、それを望む者に供給します。それだけでなく、川からの美食もすぐ近くを流れています。そのため、たとえ海の方に敵がいたとしても、この都市は自給自足でき、自身のものを不足なく利用することが出来ます。しかも、まさにこの都市から隣の湖を見下ろせば、何と優雅な安息が目にもたらされることでしょう。〔その湖は〕あるところでは隣り合う平原を楽しんでいます、またあるところでは荒地と一続きになっており、あたかもそこまで自由のために抗い十分に争ったかのように、それに譲歩しています。そして、その両側で山々と連なっていることも、貴方にとって不愉快に思われることではないでしょう。あたかも偶然ではなく、むしろ調和的に、一様に

---

<sup>40</sup> アスカニア湖を指す。

起こったかのようです。そしてその目的は、あたかも都市のためにそれ〔＝湖〕を柵で囲い、閉じ込めることであるかのようです。私には分かりません——ちょうど例えば人の手による作品についてそうするように、好きな方向から見たり取り扱ったりするという、喜びと愉しみの営みなのでしょうか。それとも都市に与えられた海の似姿で（何故ならそれ〔＝湖〕は遥か遠くまで行き、見る者を免れるからです）、恋情の原点なのでしょうか。というのは、ひょっとしたら嫉妬した隣の海が待ち伏せをし、〔湖を〕罠によって捕らえてしまうのではないかという懸念が少なからずあるからです。けれどもそれ〔＝湖〕は安全に行き、自らのものを出来る限り近くへ遥々送り届けてみせています。そして、そこからの計略を潜り抜けると、そこでこの都市との約束を思い出し、喜んで引き返し、我に返るのです。

6. しかし、これについては、演説は恐らく十分に語ったでしょう。ところで土地については、まず沢山の美しさがあります。非常に多くの平原が四方八方から都市に接しており、お互いと、そして都市と優雅に一体化しているのです。また、それらが生み出すものは沢山の利益であり、あらゆる種類の生産物に活力が与えられています。事実、それ以上良く実りをもたらすものはありません。むしろ、まさにあらゆることの中で最も見出しにくいのは、彼女自身の産物のうち、どれにおいてこの都市が自身に劣っているのかということです。他〔の都市〕にとっては、気前の良さが全てを満足させることはなく、むしろ物を欠いていることがあります。〔それらにとっての〕幸福とは、必需品を欠かさないことなのです。ところがここでは、必要な限りのものが手許にあると共に、贅沢を色とりどりに飾るあらゆるものを享受することが出来ます。その土は、物惜しみをしない貯蔵庫なのです。そして、ほとんど唯一この都市でだけは、苦勞せずに贅沢をすることが出来ます。あらゆる種類の作物が多量に育つ一方、葡萄の樹については、驚くべきことですが、そのあまりの数の多さと生来の良質さ是一目瞭然です。そして、私はまだ草木の実りを言い添えておりませんでした。その数の多さについては言うまでもなく、美への愛と自然のこの点についての工夫とがあまりにも大きいため、それらはまるで異国から常々やってくる自然の驚異のように、産地を離れ、到達することが許される限り遠くへ行っています。ある者たちは既に、ほとんど同等のものを生産する原点としてここで採れた芽を植えることで、ここの豊作から彼ら自身の豊作に利益をもたらしたり、繁榮させたりしようとしてきました。

7. それから結構な数のこうした事実を、外からこの都市に持ち込むことができます。ところで、彼女自身の王冠にして、あらゆる意味での——その栄華の最後の勝利と言うべ

きか、それとも最初の勝利と言うべきか分かりませんが——真に揺るぎない境界（一体誰がそれを見て驚嘆しないでしょうか）、それは彼女を取り囲む壁です。その〔建造〕技術ゆえの絶大な自信は、それらに対する如何なる類の攻城兵器による企ても問題にならず、むしろ不可能なことへの無益な時間の浪費に終わってしまうほどです。都市の形は円形で、現存する中で最も広々としています。彼女は傍にあるあらゆる不平等を厭い、それらを繋ぎ合わせることを名誉としています。如何にも、何と多く〔の都市〕が荒地を誤魔化し、工夫を凝らしてその陰しさを騙し騙し使っていることでしょうか。対して彼女は、人間を愛し、平坦に築かれており、彼女自身とその外壁を信頼しています。そうです、それら〔＝外壁〕は非常に精巧に造られているので、その揺るぎない用心、比類のない美しさ、そして華麗な鎖を見ることは、愉快であると同時に驚きでもあります。事実、例えば建材の調和による全体の造りの不動の堅牢さがあり、他方でその中央には複数の塔もあります。これは基礎を信頼し、高みに向かって駆ける一方で、下方では一連の全防衛線シュナスビスモスの前に立ち、堅忍不拔の戦士として敵を迎え撃ちます。それらは互いに親密で、少しも離れることを望まないで、ともするとまさに何か踊り子たちが回っているように見えるかもしれません。調和が取れていて、都市の中で味わうにはこの上なく楽しいものですが、武装しており、もし誰か敵が外から近付く場合には、〔彼にとっては〕出会うには近寄り難いものです。これらの点でこの都市はあまりにも高尚なので、ご承知のように、少し先に別の防壁も設置しています。これだけでも、他〔の都市〕にとっては恐らく十分だったかもしれません。何らかの困難な地形も味方に付けることで——大抵の場合において、彼らが工夫を凝らしてきたように。しかし彼女の場合、安全のための多大な計らいがこのように満足させることは決してなく、現に、これを革新することも失念していません。ご承知のように、その先にも、泥で満たされた深い堀が伸びています。知覚を惑わすそれは、予期せず落ちる者たちのために彼女が隠し、温存しているものなのです。

8. しかし、なぜ演説は未だに都市の外で時間を過ごし、中に入ってこないのでしょうか。何となれば、彼女は至るところで驚嘆すべきものを手近に提供しているのですから。第一級の都市として十分なほどのその広さは、犇めくように連なった建物にとっては、それ自体としては不十分のように思われますが（それら〔＝建物〕の大部分は空に向かって競い合うと共に、技術の潤沢さをその高みから見せつけており、際立って巧みに造られています）、それだけでなく、利便性に豪華さを加えた魅力的な浴場も豊富にあります。また、真に素晴らしい政府の時代にここに加わったのは、思うに、一方では多くの美であり、他方では大いなる利益、それはつまり、貧困の中にあって病に苦しむ者たち



のための公共の宿のことです。それらの建物の美しさに驚くことも然ることながら、それ以上に畏怖すべきは生来の弱さの自覚と意識、そして技術による病への援助と貧困への慰めの双方に関する <sup>フィラントロピア</sup>博愛であり、これは聖なる病の下で自らの人生にすっかり絶望し、我々の生来の——弱さと言うべきか、それとも軽さと言うべきか分かりませんが——その唯一の普遍的な治療薬であるところの希望を失った者たちと、彼らの間でさらに貧困にも苦しむ者たちとに、異国の人にも国内の人にも、個別に分け与えられています。陛下の <sup>フィラントロピア</sup>博愛は、双方に憐みを分け与えるからです。そしてそれは、<sup>メガロプシュキア</sup>寛大さによって需要に勝ります。その上、人体の下等さを超えて思い上がってはならないということを、〔施設で〕行われることを通じて我々に思い起こさせもし、都市に名誉を与えているのです。

9. それから、これらの尊き美への捧げ物、今日の科学の輝かしき記念碑。その成果。華麗で崇高な儀式。物質的なものから退き、ただ神だけに時間を注ぐことを選んだ者たちの聖なる修道院群。これほど多くのものを提供できる都市が、一体他にあるでしょうか。そのあるものは男たちのためのものであり、あるものは他の部分〔＝女たち〕のためのものでもあります。彼らは高潔な心を持って、いずれも同じ努力を引き受けています。彼らの選択〔した修道生活〕に伴う労苦は、未熟で十分な時間を満了していない者たちにとっては準備に、そして歳を重ねて楽しんできた者たちにとっては完遂に、それぞれ依存します。これはこの都市の名声を大きく、ともすると他の何よりも大きく増すものなのです。

10. とは言え、これらのことを話題にし、議論に時間を費やすわけにはゆきません。何故なら私は、一方では現実に近いことが叶わないことを甚だ恐れているからであり、他方ではこのような者がそうしたことに演説を持っていこうとした時に、共にいる人々の笑い物になってしまうことを恥じているからです。ただ、このように生きることを選んだ人々と、この高尚な人々の集まりが瞑想する神聖なる住居それ自体が、他のどこにも無いほど沢山存在するということです。そして、そのほとんどが言葉に出来ないほど美しく、目で見ても大きな喜びであり、演説にとっても、このことを扱うことは決して危険ではありません。例えば神聖なる教会については、職人技による精巧な安全性は大きく、咲き誇る美しさもまた数多です。天井は黄金の輝きと塗料で描かれた花々によって豪華に飾られており<sup>41</sup>——芸術はあらゆる装飾をここに費やしています——そして

<sup>41</sup> 突如、ある特定の「教会」(ναός)の内装に関する語りが始まっている。この建物は、フォスよりニカイアの聖ヒュアキントス修道院附属聖堂に同定されている。Foss, *Nicaea*, 115–17.

これは、遙々それぞれの側壁へと下っています。それに続くのは色とりどりの石の輝きで、上部の美しさに匹敵しています。色彩のあらゆる種類の違いに芸術が協調し、調和の比率を工夫しています。同じく下部と床も、同様の多彩な装飾で織り上げられており（というのも、そこにある全てが上部に匹敵すべきだったからです）、そして柱廊が続きます。それらは下にある柱を信頼し、基礎を我先に掴もうと競いながら、出会う人の目を欺いています。中央には複数の柱も上に伸びており、そのあるものは重厚さを、またあるものは欠乏を——つまり、一方では自然の豊かさの証明を、他方では技術の経済性の証明を——称讃に供しています。それらの柱頭と脚は、芸術の無限の断面を提供しています。そして、その豊かな美で万物を支配する金がそこに嵌め込まれています。全てが輝き、全てが互いに似ているのです。それに、まだ私は言い添えていませんでした——神聖なる図像の絢爛さ、そこでの高価な石の真に価値ある使用。改めて、装飾のために埋め込まれている金。尊き供物に表れる敬虔さ。重々しい衣服。そして、聖書の宝庫を。さて、聖堂を出た人を直ちに迎えるのは、蓋し目で見ると大いに喜ばしいものですが、一方に広がる草原、他方には実り多く豊かな木々であり、さらには、いくつかの実りなき木々までもがそこに貢献しています。というのは、実りをもたらさず、しかし真直ぐなのは、糸杉です。空に向かって伸びており、私にはそれが、そこで瞑想する人々に対し、どこへ走り伸びてゆくべきかを素朴に教え示しているように思われます。成長するにつれて徐々に物質の無駄を削ぎ落とし、上に行くにつれて細くなってゆきながら。またそこでは、大地がふんだんに供給する水の流れと、工夫を凝らした技術が空中から自然の上に噴出せしめている水の流れ、その両方に驚嘆することもできます。そして私は、思考力が疲弊し苦痛から暫く解放される時に、〔そこに〕住む人々の中に生来の弱さからの休息として生起するもの、そして欲求についての無言により、魂のより純粋な愉しみに時間を割くことを可能にしているもの、それらの多くを語らぬままにしたいと思います。

11. そしてこれらは、実在するもののほんの一部に過ぎません。この都市全体に立つ他の多くの教会と装飾を、私は割愛しました。それらは有り余るほどの美で、美德を思い起こさせるもので、人々の敬虔さの解けぬ絆です。もし私が望むように、それら全ての中の一つを〔私の〕試みの主題として演説に提供する時間があつたなら、またもし貴方がそれを望まれるなら、まさに、気高きトリュフォンの闘いをその名に銘じるそれ〔＝教会〕がそうです<sup>42</sup>。何と偉大で、何と優雅なのでしょう。〔この話題を〕続け、現実

<sup>42</sup> 聖トリュフォンはニカイア市の守護聖人である。ニカイアの聖トリュフォン教会については、R. Janin, *Les églises et les monastères des grands centres byzantins : Bithynie, Hellespont, Latros*,

に全く劣らない形でやり遂げることは、この上なく大層な仕事だったことでしょう。

12. ところがしかし、演説は何故これを急いで通り過ぎようとするのでしょうか。喜びに結び付いた奇蹟であると同時に、この都市にとって、他に知らないほどの名声の源です。毎年、記念の時期になると、天上の草原から致命者〔＝聖トリュフォン〕が花を持ってここに来て、自生する果実を、空中の草原を——否むしろ、草原の無い花を、根の無い果実を——驚嘆に供します。そしてこれは、都市に対する致命者の配意の証であると共に、彼の配意の動機であるところの、彼に対する〔人々の〕崇敬の証なのです。故郷が、あるいは長期滞在が、あるいは最後に、祝福された臨終の時が引き寄せるところの地で御業を見せる〔＝奇蹟を起こす〕者たちには、誰かが次のように言うかもしれません。すなわち、〔彼らの〕<sup>フイロデイミア</sup>惜しみなき施しには昔からの関わりが必要なのではないかと。そしてこれら〔＝奇蹟〕は、それまでの幸運に対しての、<sup>メガロプシュキア</sup>寛大さの点で勝る恩返しなのではないかと。しかし、まさに今この致命者と都市の場合が確かにそうであるように、〔このような動機〕全てが欠けている時、それがただ御恵みのみに由来するもの、喜んで〔人々の〕敬虔さを裏書きする御恵みに由来するものでないとするれば、一体何とすべきでしょうか。

13. しかし、私が敬虔さに言及した以上、たとえどんなに無知な者であろうと、この都市には誇りを持つ大きな根拠があるということ、すなわち、真理の教義の泉がここから他の全人類に流れたということ、そしてそれゆえ人が神性について正しく考えるための始まりと基礎があるということを、果たして知らぬ者がいるのでしょうか。その証明は手近で、すなわち、キリストに叛逆した者たちに対する地上における最初の<sup>ジュナスピスモス</sup>防衛線、偽りの戦士らに対する最初の真理の<sup>パラタクシス</sup>戦線が、ここに団結し、あらゆる異質で敵対的なものを聖霊の剣（エペソ 6:17）で断ち切ったということです<sup>43</sup>。これは、アリウスの傲慢な不敬行為がエジプトに始まり、世界中に蔓延し、何か悍ましい病が忍び寄るように、既に教会の美しい身体を蝕もうと足搔いていたためでした。ところがそれは、正しく置かれていたものに打ち勝ち、それを完全に根底から覆すにはあまりにも弱すぎたために、ここで行き詰まり、この都市によって断罪されたのです。というのも、かの偉大なる敬虔な御方——彼を教師と呼ぶべきか、それとも奉公者と呼ぶべきかは分かりませんが——最初にキリストと共に皇帝となった御方〔＝コンスタンティヌス 1 世〕が、彼自身の事情との間に一種の同盟を結ぶことを自ら決断し、聖霊の解釈者たちを各地から集め、

*Galèsios, Trébizonde, Athènes, Thessalonique* (Paris, 1975), 121.

<sup>43</sup> 第一ニカイア公会議を指す。

この一つの不可欠な競技——神に関する意見の安全性を教会に取り戻し、不実で下劣なもの全てを妨げ除去すること——を彼らに提示したのです。彼は、まさにこの都市だけがこの目的と必要性を満たすことができ、目下の努力と、そこから未来永劫もたらされる良き運命の重さに耐えうると見込みました。そして当時、<sup>オイクメネ</sup>世界とほぼ同じ広さを持っていたローマ帝国の全ての都市は、地上の都市も、ましてや海上の都市も、この判決に異議を唱える力を持っていませんでした。そして彼は、彼女への<sup>メガロプシュキア</sup>寛大さからこのように判断したわけでもなければ、即席で終わらせたわけでもありませんでした。むしろ、直ちに全てを精査し、全てを提案し、この美しい饗宴を都市に捧げたのです。

14. したがってその時代、この都市は世界を統率しており、その統率力は真に神々しいものでした。他の全て〔の都市〕が付き随い、敬虔さの協定を受け取るべく使者を送っていました。そして、ファラオがその傲慢さに相応しい破滅を被った時（出エジプト 14:28）。崖が割け、真理の川がなみなみと流れ出た時（申命 8:15）。約櫃がもはや石板を隠さず（申命 10:2-5）、開かれて神の法を自由に示し与えた時。調和の支配人が最初の旋律美しき和音を奏でた時。その時、全てが一度に起こりました。まず、ここからの敬虔さの流れを、使いたいと望む人が誰でもすぐに享受することが出来ました。それから、真理についての神の定義の布告と伝達が、至るところで行われました。そして最後に、この普遍的な堅琴が、ここからの出発点と最初の動きの後に、全てを巧みに調和させ、神に関する安全な見解に向け、旋律美しい和音を奏でました。これが教会全体の教義の始まりにして最初の和解であり、これが今日の信仰の支えなのです。これらの前提の上に、この基盤の上に、後代の人々の仕事ぶりと、時として真理に刃向かう者たちに対する彼らの戦いがあるのです。

15. 如何にも、多くの人々にとってはここが良いことの限界であって、この都市には以上の事実についての成果に由来する栄誉が十分にあり、この演説にも語ることが十分にあると思われたかもしれません。後代における信仰というものの全てが、ここで、この都市によって与えられた起源に端を発することは明白なのですから。それに実際、他の人々にそのように考えさせ、判断させるにも十分でしたし、何よりこの演説にとっても十分でした。ところがこの都市は、<sup>メガロプシュキア</sup>寛大さにおいて実にあまりにも傑出しており、絶えず明確に彼女自身らしく行動し、それを続けてきたために、あらゆる予想を上回り、二つ目を追加し、異端者に対する全ての闘争と戦いに終止符を打ったのです<sup>44</sup>。この最後〔の集会〕は、先行する六度の聖なる教師たちの集会に続くべきものだったのですか

<sup>44</sup> 第二ニカイア公会議を指す。

ら、信仰の安全な保管庫は、健全な信義の最初の固定が行われたここでなければ、一体どこにあるべきだったというのでしょうか。如何にも、<sup>クロノス</sup>時間は何が正しいかを認識しており、これ〔＝最後の集会〕をもこの都市に与えたのです。否むしろ、教会に、この都市がこれをも与えたのです。そして、かつてこの問題に関する全ての運動の基礎と始まりを築いたように、あらゆる点での仕上げを、そして最終的な結束と安全を、彼女はもたらしました。もし誰かがこれを偉大なことと考えるなら（実際、疑いなく最も偉大なのですが）、真理の最初の明示というものを、この都市は生み出したのです。それに、もし誰かがその後の再度の印璽と完全な有効性をも偉大なことと考えるなら、これもまた、この都市に帰せられるのです。

16. 古いことには、新しいことも完全に一致するものです。過ぎ去ったあの時代、ローマ人の国家が、天秤が反対側に振れるのを感じた時。以前の繁栄から一変し、前線に立って他を圧倒する力を持っていたかの都市〔＝コンスタンティノーブル〕が、運命に従うことを決めた時。帝国全体の幸運が転覆し、それから病に陥り、あるところは奪われ、あるところは危険に曝され、またあるところはそうなることが予期された時。恐ろしいことが一度に起こりました。内乱、時宜を得た蛮族の襲撃、そして何より、全世界の情勢の最大の変革が起こっているように思われ、同時に、地上の何よりも強大で崇高な帝国が、完全に奪い去られ、破壊されてしまうのではないかという危惧が少なからずありました。そのような時に、この都市〔＝ニカイア〕もまた事件に巻き込まれ、他と同じ運命を辿るのではないかと危惧しなかった人が果たしているのでしょうか。しかし彼女は、困難の波にいと高き抵抗し、むしろそれを克服して生き抜いたがゆえに、ローマ人の国家全体にとっての<sup>アクロポリス</sup>城塞の代わりとなり、彼女の許に來た帝権を喜んで迎え入れ、第一に体制を整える機会を与え、次いで自らの問題に対峙する機会を与えたのみならず、その善行にさらに追加する形で、彼女はまず信仰の座〔＝総主教庁〕を、教会の秩序正しき組織を、まさに今日の情勢の原初にして最も完全な安全と結束を受け入れたのです。そして彼女は、他のものと共に彷徨い、危機に瀕していた学問それ自体を受け入れたのです。実際、この都市は、彼女自身と、これらに関するかつての誇りとに値するということを、一体これ以上どうやって示すことが出来たのでしょうか。あるいは、これ以上どうやって彼女の同胞たちに彼ら自身に相応しい思想を吹き込み、敵の傲慢さの抗し難い衝動を断ち切ることが出来たのでしょうか。ニカイア人の都市が家主である限り、あたかもローマ人にとって困難なことは何一つ無く、以前の繁栄に及ばないことは何一つ無かったかのようです。このようなことを引き受け、成し遂げた彼女は、先に述べたようにそこから全てを安全にすることが出来ただけでなく、それに加え、単なる平凡さや自己

満足を超えて、自らの時間をこうしたことに惜しみなく捧げる者たちだけに与えられる名誉をも得ました。この働きは、敵の無謀な期待を打ち砕き、帝国の完全な瓦解を食い止める一方で、後の復活の種を保存しました。そしてこの都市は、謂わば分解されたローマ帝国全体のための樹液となり、それを再び集め、組み立てたのです。この働きは、隣り合う海を誇りとする諸都市の中で、貴方がたが思い描く如何なる都市にも実現できることではなかったことのように私には思われます。謂わば彼女は、まさに折良くも救済の施与者となり、この安全性において手付かずの都市は、海からのものに感ぜることでもなかったのです。しかし、後にローマ人の情勢が回復し、それまで壊滅していたダビデの幕屋が再び組み合わされて組み立てられ（サムエル下 6:17、アモス 9:11）、卑賤な無法者が敗れ撤退し、約櫃がイスラエルに戻り（サムエル上 6）、<sup>クロノス</sup>時間が帝国全体の最も美しい装飾である都市の女王〔＝コンスタンティノープル〕を連れてきて、借りを作っていた人々にそれを負債として返済した時のことです。その時、困った時の母のように〔彼らを〕保護し、見守ってきたこの都市〔＝ニカイア〕が、かの見事な寄託物、すなわち教会の栄光を最愛の者〔＝コンスタンティノープル〕に返還し、彼女自身の財産から惜しみなくさらに加えました。彼女はまた、<sup>ロゴイ</sup>学問それ自体を送り出し、第二の生命の源となる見事な移民団を送り出しました。そして潤沢な芸術を提供し、あるものは一緒に送り出す一方で、あるものは彼女自身の許に残し、その装飾の完成をここでしか見られないものとししました。もしかすると、それは愛情を思い起こさせるものとしてであると同時に、受け取った全ての厚意に対する感謝を示すためだったのかもしれませんが。しかしそれでも、彼女はその中の価値あるものを送り出し、ここにしかない最高の織物で宮殿を飾っています。そして私は、多くを語らぬままにし、この都市と同じ寛大さを示すべきと考えました。このように、彼女は全てを分け与え、しかし全てを十分に持ち、第一級の都市に劣っている点の一つもありません。むしろ彼女は、あるものはその好都合な立地によって、あるものは土地の質やそこで実るあらゆる種類の作物によって、あるものは防壁の規模によって、あるものは自信によって（しかも、それは美しくもあります）、あるものは内包する美によって、またあるものは彼女自身の中の新旧の慈善事業の共用設備によって、それら〔＝第一級の諸都市〕を凌いでいます。つまり、彼女は全体においても個別の点においても、全てにおいて全てを上回っているのです。

17. そして、最も強大なる陛下、貴方のこのことについて、一体誰がどうして黙って見過ごすことが出来るのでしょうか。特に、貴方が主君かつ保護者であられることで、彼女は豊かになり、他〔の都市〕の中で主からのこれほどの幸運を享受し、確立され、発展し、今なお希望を持って絶えず勇気を育んでいます。それから、これは決して些細なこ

とではありません（実際、どうしてそうなるでしょうか）——それどころか、偉大で、あらゆることの中で最も偉大な美の証言です。それはこの都市に対する貴方の熱意、気前の良い愛情、〔貴方の〕事績への言葉による装飾。そして、貴方はそこにあるものを享受し、明らかに、より多くのものがあればと望んでおられる一方で、力があり、あらゆるものを次から次へと追加しておられます。その証拠に、貴方はその都市で時間を過ごしていらっしゃいます。美しいものとの邂逅は愛情を温めるものです。貴方は、厄介な隣人から得られる限りの贈物を贈り、恵み与えることを常としていらっしゃいます。そして貴方はそこから、俗に言うところの「ミュシア人の戦利品」<sup>45</sup>——容易く数えられないほどの奴隷、無数の馬、無数の牛、そして同じくらい多くの他のあらゆる家畜——を運び、大いなる希望の保証を都市にもたらしていらっしゃいます。かくして貴方はまず常に敵を凌駕し、貴方以前に国家の頂に立っていた全ての人を凌駕し、そして何より貴方自身を凌駕し、日々の施しを通じてますます偉大な存在となっておられます。貴方はただ美しいことにのみ属しており、そこでは完全無敵の貴方も圧倒され、善への愛、より良いものへの熱意ほど貴方をこのように捉えるものは何もありません。しかしながら、他のものと同様、貴方は言葉をも凌駕しており、小さなものも大きなものも、全てが貴方の行いに及ばないという以上、一体どうしてこれ以上これらのことに時間を費やす必要があるのでしょうか。ただ貴方がここにおいて、全てに続く、この都市と演説の最後の装飾として記憶されますように。

---

<sup>45</sup> E. L. von Leutsch and F. G. Schneidewin (eds.), *Corpus Paroemiographorum Graecorum*, vol. 2 (Göttingen, 1851), 38, no. 16.